

モジャモジャ天然パーマに黒く太い眉。切れ長の目にパンと張った赤みを帯びた頬。Kさんは一見野人のような風貌であった。でも乾いた麦わら帽子のような清潔感があり、内には繊細で特異な素養を持つ人だった。

僕よりずっと年上だが、友人のように接してもらった。植物に詳しく、自らも育てたが、人間本位の趣味的慰めとは一風違っていた。

咲く花や枯れた草にも、分け隔てのない深く清々しいまなざしで感応する。同じ地平に在るごとく透徹した態度には、滲み出るようなやさしさがあった。

今、人々はとめどなく生まれる仕組みや人工物に絡み捕られ、素の人間力は弱まるばかり。Kさんにも測候所勤めという職業があ

り、家庭もあった。だが、社会に順応しながらもシステムに身を縮めず、太陽の光や雨風をありがたみとして受け止め、音楽や絵に親しみ、人とも通ずる。歩いたり、せいぜい自転車で動く範囲の中で生き、生かさず、しなやかな均衡を得る。グローバリゼーションに相反する現代人の窮屈さを思

Kさんという生き方
例えば、構えないKさんの暮らしぶりは示唆に富んでいるのではないか。

宇和島勤務が長かったが、高知の土佐清水市に変わったところは幾度か官舎を訪ね、貝殻や流木の宝庫であつた足摺岬周辺を2人で歩いた。それはおおらかな至福の時間であつた。

最後の勤務地松山市に移

ると、背広にネクタイ姿でテレビの天気予報に出始めたのには驚いた。こちらとしては毎日ヒヤヒヤもの。だって「台風は順調にこちらに向かっていきます」なんて真面目な顔をして言うのだから。

その後、僕の出無精もあ



って次第に遠のいていたある日、半年も前に亡くなっていたと知らされた。献体し、葬儀もなく、遺言からその死も伏せられていたのだ。ショックでからだの片隅が抜け落ちるようだったが、「らしい」とも思ってしまった。

Kさんが定年退職したころのこと。海外旅行なんていかにも似合わないのに、パプアニューギニアに行った。後日「どうでした」と聞くと、真顔で言った。「密林の中の道を歩きよったらねえ、もうこのまんま吸い込まれてもええと思つた」。僕は「そつですか」とつなぎ、2人は黙った。

Kさんも、現世との乖離からくる生きづらさを募らせていたのか。僕の知らない何か重荷でも……。いや、たとえあつたとしても、Kさんは超俗して密林に立ち、無垢の自然にただただ感動したのに違いない。

鬱蒼とした植物にどっぴりつかり、どこまでもひとり分け入って行くKさんの後ろ姿が、いつも目に浮かぶ。

(吉田 淳治・画家)